いへり、易の反生をもよめり、稂をよむは非也、肥前には一年再熟の稲ありて、稲孫を民間の食用とす、又此草を產帶の中に入る、事、又產室の片疊に是を用うるは、故實ありといへり、尾州にひうち、越前にひとてといふ、

〔一話一言〕ひつぢいね

明の焦周が說楛に云、南海稻經穫再生、名稻孫穗穉、これ今いふひつぢいねなり、按易說卦傳、其於稼也爲反生、このヒタチはひつぢいねなるべし、

〔重修本草綱目啓蒙十七麻麥稻〕粳

增、〇中略已ニ稻ヲ刈テ後、又苗ヲ生ジテ穗ヲ結コトアリ、諸州ニアリト雖ドモ、暖國ニ非ザレバ、實ヲ結コト甚稀ナリ、土州ニ最多ク、民用ニ利アリ、又九州地方ニモアリト云フ、コレヲヒツチボト名ク、ヒツチバエ、又ヒトデ、越前ヒウチ、尾州マヽハエ、佐渡シトテ、若州シトヽ、同上　漢名稻孫、呂氏春秋

一名反生、易經　再熟稻、農政全書　金洲、閩書南產志　白香秫、同上

〔古今和歌集五秋〕題しらず　よみ人しらず

かれる田におふるひつぢのほに出ぬはよを今更に秋はてぬとか

〔後撰和歌集五秋〕ふたりのおとこにものいひける女の、ひとりにつきにければ、いまひとりがいひつかはしける、　よみ人しらず

あけくらしまもるたのみをからせつゝたもとそほづの身とぞ成ぬる

返し

心もておふる山田のひつぢぼはきみまもらねどかる人もなし

〔曾根好忠集〕七月中

我宿の門田のわせのひつぢぼをみるにつけてもおやの戀しき